

## 研究所訪問

### 岩手県環境保健研究センター

### Research Institute for Environmental Sciences and Public Health of Iwate Prefecture

所在地：〒020-0852 岩手県盛岡市飯岡新田 1-36-1 Tel 019-656-5666,

Fax 019-656-5667, e-mail : CC0019@sv01.sg.pref.iwate.jp

岩手県環境保健研究センター（以下センターと略称する）は平成 13 年 4 月に盛岡市内丸の旧庁舎内にある岩手県衛生研究所と岩手県公害センターを統合して、同市飯岡新田の新庁舎に移転した。

新庁舎は市の中心部にある旧庁舎から南西方向に直線で約 4 km に位置し、21,000 m<sup>2</sup>の敷地面積に延べ床面積 6,009 m<sup>2</sup>の 3 階建鉄筋コンクリート造りである（写真 1）。図 1 に所在地を示した。人口約 29 万しかない盛岡市にあっては、新庁舎付近は合併前の旧都南村に位置し、現在でも庁舎の周りには古くからの民家が散在しており、将に田園そのものである。それだけに近代的庁舎だけが際だって異様にみえる。庁舎へは、盛岡駅よりタクシーで 10 分、バスで 45 分もかかり、公共交通機関での通勤者や訪問客には、狭い道路が紆余曲折していて将来開発整備されるだろうが、その点において、やや不便である。

センターの沿革は大正 12 年 10 月に岩手県警察部衛生課所属の岩手県細菌検査所に始まり、これに化学試験室が併設され、昭和 23 年 11 月に岩手県衛生研究所になった。昭和 44 年 3 月盛岡市内丸の県庁近くに庁舎が竣工され、昭和 46 年 4 月に環境衛生部と公害センターが新設された。これに伴って昭和 47 年 5 月に増築工事が行われ、ついで昭和 49 年 4 月公害センターが管理係、大気科、水質科の体制をしいた。昭和 56 年 4 月衛生研究所の細菌検査部が微生物部に部名変更となり、平成 13 年 4 月に現庁舎竣工と共に衛生研究所と公害センターが統合し、「環境首都」を標榜する岩手県



写真 1 岩手県環境保健研究センター正面全景（パンフレットより）

の理念と期待を担い、その科学的・技術的拠点として同センターは誕生し現在に至っている。

センターは単に調査と管理のみを業務とするのではなく、グローバルな視点から地域環境健康保全のための情報活動はもとより、全国、世界への情報発信、大学や企業など、いわゆる産学官の情報交換や共同研究、行政への指導や情報提供を図り、人類の為に資することを目的としているとのこと。その一端を表すかのように、センターを訪れて、まず最初に目についたのは円形玄関ホールに提示してあるパネルにあった。説明によると庁舎の省エネルギー対策に力を入れているとのこと。電気エネルギーの一部は屋上に設置された太陽光パネルによる20 kw/hの電気量を利用している。これは全使用電力の6%ほどをまかなっているとのこと。また、熱エネルギーは深さ約50mに22本のパイプを挿入し、ヒートポンプによって地中熱交換をし、暖房能力62kwを得、冷暖房等に利用しているとのことである。

1階から3階までの本館には30近い研究室、分析室があり、最新機器を使った各種の研究や分析が行われている。また、本館に接続して312m<sup>2</sup>の付属棟があり、主として動物実験棟として活用されている。

センターの組織を図2に示す。46人の職員の多くは専門職で、温泉関係は図2の太字で示した菅野部長をチーフとする衛生科学部内にある。同部は食品、水道水、医薬品なども扱い、



図1 岩手県環境保健研究センターの位置

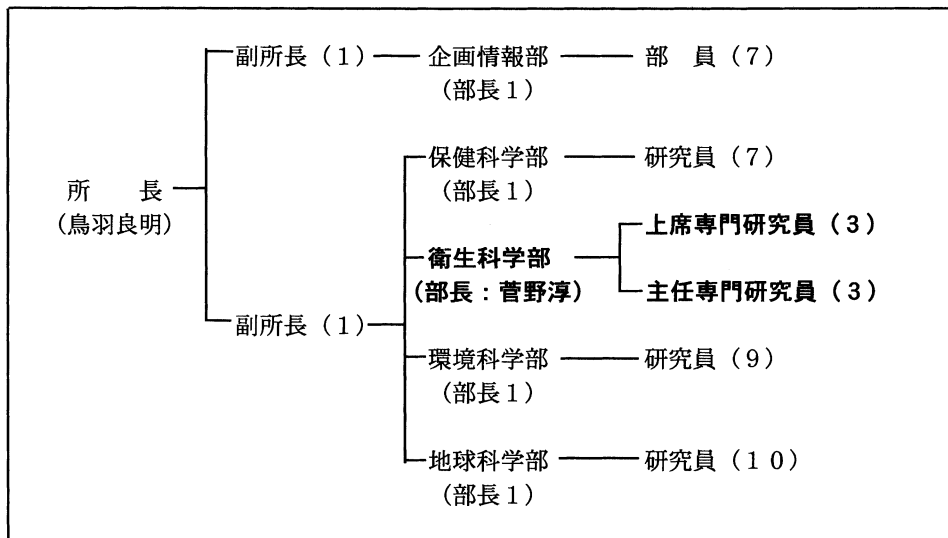


図2 岩手県環境保健研究センター組織図  
( )内数字は専任員数を示す。

それぞれに独立した専任があって、すべて部長直轄のプロジェクトチームになっている。温泉担当は水車正洋首席専門研究員お一人であり、現在 30 件ほどの依頼分析および温泉の調査や研究などを行っている。

近年、水質に限らず環境基準値が厳しくなってきたり、機器分析技術はその評価方法の一手段として非常に重要になってきている。よって、より再現性のある精密微量分析機器の設置は不可欠となっている。センターでは新庁舎の竣工に合わせて、新規に分析機器を購入し対応している。主な機器を以下に紹介する。高分解能ガスクロマトグラフ質量分析計、電子顕微鏡（透過型、走査型）、液体

クロマトグラフ質量分析計（2 機種）、DNA シーケンスシステム（2 機）、誘導結合プラズマ質量分析計、誘導結合プラズマ発光分光計（ICP-AES）、ガスクロマトグラフ質量分析計（化学イオン化法、四重極、イオントラップ型）、高速液体クロマトグラフ、イオンクロマトグラフ（2 機種）等である。筆者はかつて大学の化学系に勤務した経緯があるが、最新機器の機能性、精密性の抜群さには、ただただ羨ましさを隠し切れなかった。数時間で結果を出せる高速性は何日もかけて 1 件の分析データを得た昔と較べると嘘のようである。しかし、それだけに分析操作に細心の注意が必要で、「結果の評価に気を使う」と水車研究員は熱く語ってくれた（写真 2）。

温泉関係の調査および研究は水質の化学成分は勿論のこと、細菌汚染による周辺環境への配慮等、多岐に亘り複雑化の傾向にあるため、先見的、洞察的な研究への取り組みを考慮しなければならない時代になってきているという。

最新機器を備えた、しかも真新しい建物はいいなあと、感嘆しながらセンターの今後の躍進を願って玄関を出たら、外は奥羽山系から吹き降ろす寒い風で、天国から地獄へスリップした錯覚に捕らわれた。短い首をさらに短く肩を締め、急いでマイカーに乗り込み、バックミラーに映る岩手山の素晴らしい景観を見ながらセンターを後にした。

（梅津芳生，日本温泉科学会編集委員）

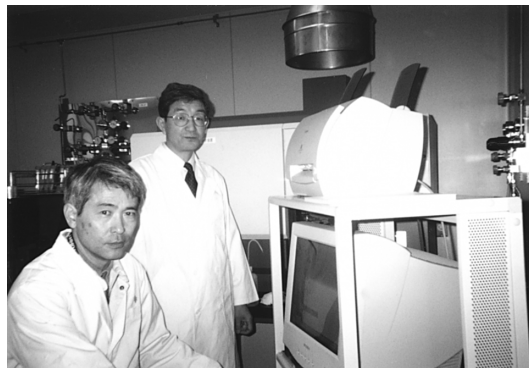


写真 2 ICP-AES 分析室の一部  
手前が水車首席専門研究員  
後方が菅野部長。